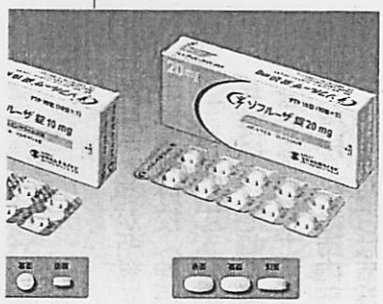
42回生　気になる記事を共有しよう　2019．2．13　分

インフル新薬に人気集中

インフルエンザが猛威を振るう中、昨年発売されたばかりの治療薬「ゾフルーザ」に人気が集まっている。1回だけの服用で済むなど、既存薬に比べて使いやすいためで、製造販売元の塩野義製薬は増産の検討を始めた。ただ、薬が効かない耐性ウイルスができやすいという課題もあり、専門家は「安易に飛びつかず、監視を強化する必要がある」と慎重な使用を呼び掛けている。

服用1回でOK「ゾフルーザ」



ゾフルーザは、ウイルスが細胞内で増えるのを抑える働きがある薬で、タミフルなどの既存薬とは仕組みが異なる。回復までの期間はタミフルと同程度だが、服用翌日に患者から検出されるウイルス量は少ないため、感染拡大を抑える効果が期待される。専門家は「対策の手段が広がるのは良いこと」と歓迎する。

また既存薬は吸入や5日間の服用が必要だったが、ゾフルーザは1回の服用で済む。このため薬を指定して処方を求める患者も多いといい、販売後すぐに売り上げトップになった。同社によると、年明け以降の患者急増で予定していた800万人分の供給量が逼迫しており、増産を検討している。

しかし慎重な使用を求める声もある。治験で12歳未満の子どもの23・4%に服用後、耐性ウイルスが出たためだ。12歳以上も9・7%で、タミフルと比べて高い。国立感染症研究所の調査でも、感染後にゾフルーザを服用した横浜市の子ども2人から昨年12月、耐性ウイルスが検出されていたことが明らかになった。

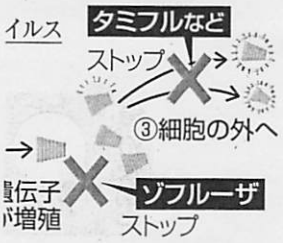
耐性ウイルスを保有する患者は回復に時間がかかるほか、外部に拡大すれば薬自体が使えなくなる恐れもある。川崎市健康安全研究所の岡部信彦所長は「現状では問題ないが、観察が必要」と話す。

現時点で目立った副作用の報告はないが、注意が必要だ。千葉県の亀田総合病院は「利用者が増えるに伴い治験では判明していない副作用が出る可能性がある」として今シーズンは処方しない方針。日本小児科学会も「十分なデータがない」として推奨していない。

同病院感染症科の細川直登部長は「利便性よりも安全性を優先するべきで、医師は求められるまま処方するのではなく、薬の特性を患者に説明する責任がある」と訴えている。

イルス検出 専門家「慎重な使用を」

ンザ治療薬が効く仕組み



ゾフルーザ　塩義製薬が製造販いインフルエ薬。厚生労働省た後、2018年売された。タミの既存薬は、ウ増殖後に細胞の を邪魔するのゾフルーザは作ズムが異なり、の増殖そのもの動きがあるのがンフルエンザ治フルーザ、タ他に、吸入薬のやイナビルなど販売されてい

主なインフルエンザ治療薬

商品名	投与法	用法用量	発売
リレンザ	吸入	1日2回 5日間	2000年12月
タミフル	経口	1日2回 5日間	01年2月
イナビル	吸入	1回	10年10月
ゾフルーザ	経口	1回	18年3月

3組女子 デザイン志望
神戸新聞 1月26日分